



山陽小野田市

ふるさと文化遺産

山陽小野田市ふるさと文化遺産

窯のまち



硫酸瓶のモニュメント

令和4年3月

山陽小野田市教育委員会

窯のまち

山陽小野田市の窯業は、古墳時代から現在に至る長い歴史の中で形態を変えながら、人々の生活に深い関わりを持った産業のひとつです。山陽小野田市の地形や風土が活かされており、当時のまちの発展や、新しいまちづくりの基盤となっています。今も小野田地域には窯業の歴史を物語る数多くの遺産や造形作品があり、窯業との深い関わりが分かります。

窯業とは「窯を用い、粘土その他の非金属無機材料などに高温加工する工業。すなわち陶磁器・ガラス・セメント・珪瑯・鉄器・煉瓦などの製造業の総称」（『広辞苑』第七版）とされています。

序章 山陽小野田市の窯業の歴史

6世紀末、古墳時代の産業として、竜王山周辺では須恵器が生産されていました。

時を経て19世紀になると、且地域では、日用雑器を焼成する窯が増えました。19世紀の半ば、天保末年（1840年頃）に「手塩皿」づくりから新たに始まった近代の窯業を飛躍的に発展させたのは、明治22年（1889）硫酸町の名にしのぼれる硫酸製造会社の創業です。

19世紀後半には、セメント会社、硫酸製造会社ができ、小野田のまちは近代産業都市として一大飛躍をとげました。近年はガラス文化に注目が集まり、新しい文化の創造によるまちづくりが進められています。

第一章 古墳 6世紀～7世紀 ①須恵器

この間、本市の窯業については、不明



第二章 江戸 ②小野田の皿山

日用雑器焼成



第三章 明治 ③セメント

日本初の民間セメント会社
「小野田セメント」徳利窯



④硫酸瓶

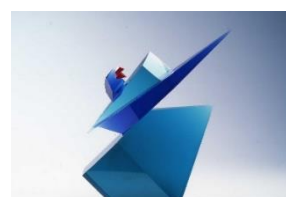
日本舎密製造会社



第四章 平成 ⑤ガラス

「現代ガラス展 in 山陽小野田」

3年に1回開催



小野田で焼き物が盛んに行われた要因のひとつは陶土に適した小野田の粘土です。

粘土を産出する地層についてみてみましょう。

本市には宇部層群と称される新生代古第三紀中—後期始新世(4800~3400万年前)の地層が広く分布しています(図1)。宇部層群のうち、陸域に分布するものは、下位の厚東川礫岩層と上位の宇部夾炭層に二分されています。宇部夾炭層には数枚の石炭層が挟まれており、かつて宇部炭田として採掘され、地域経済の大いなる発展に寄与しました。この宇部夾炭層は上・中・下の3部層に細分されています。下部層の最下部に灰青色の粘土または頁岩層があり、且地域およびその周辺各地でセメント原料および陶器原料として採掘されました。

小野田の且地域から産出する粘土によって製造された製品には、耐酸瓶、土管、蛸壺などがあります。粘土原料中で潜在的に存在していると算定される原土はネバ、マサ、アオと呼ばれたものです。これら単体の原土は、軟化して変形し始める温度が低く、また酸化鉄の含有量が多く、耐酸性に富むことが特徴です。

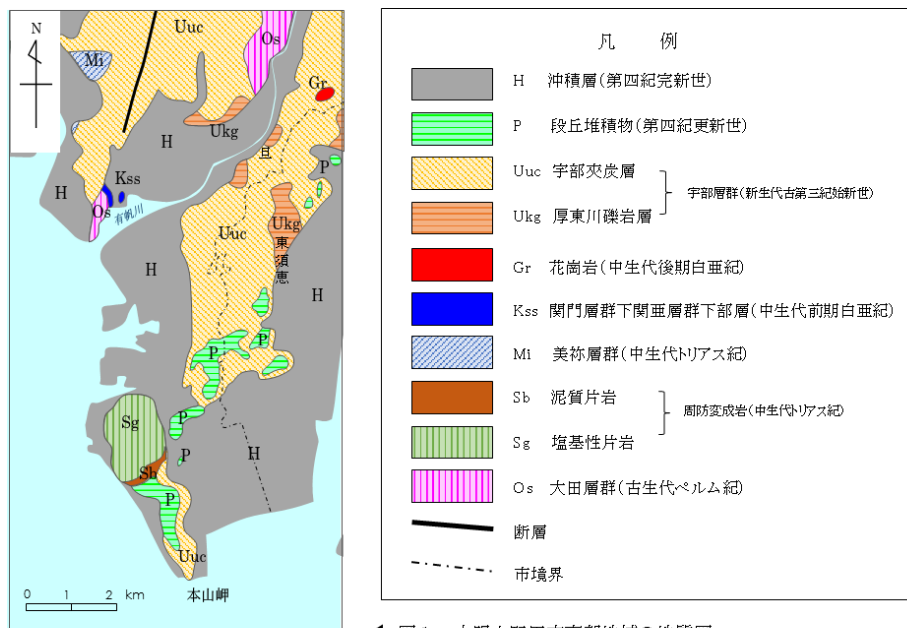


図1 山陽小野田市南部地域の地質図
[山口県地質図 第3版(15万分の1)(西村ほか, 2012)を改変]

本市南部の竜王山南麓から南方の本山町にかけて、須恵器が生産された窯跡が数カ所ありました。この地帯には、第四紀更新世の海成段丘を構成する段丘堆積物が宇部夾炭層や周防変成岩を不整合におおって分布しています(図1)。この段丘堆積物の中には、宇部地域に模式的に分布する黒崎粘土層や砂質粘土層が含まれています。地質図を参照すると、須恵器窯跡は、段丘堆積物の分布地帯の内部や段丘堆積物と基盤岩との境界(不整合面)付近に分布しているように見えます。このことから、須恵器の原料粘土は段丘堆積物を構成する粘土が用いられた可能性が高いといえます。

第1章 古墳時代の焼き物「須恵器」

1. 土師器から須恵器へ

土器は縄文時代^{じょうもん}に出現^{しゅげん}し、4世紀^{せいぎ}までは酸化焰^{さんかえん}で焼かれた素焼き^{すや}の「土師器」と呼ばれる土器^{せいさん}が生産^{もくせい}され、木製の器^{うつわ}などとともに使用^{しよう}されていました。「須恵器」の生産が日本で始まる^{はじ}のが、およそ4世紀末^{しよとう}から5世紀初頭^{しよとう}です。

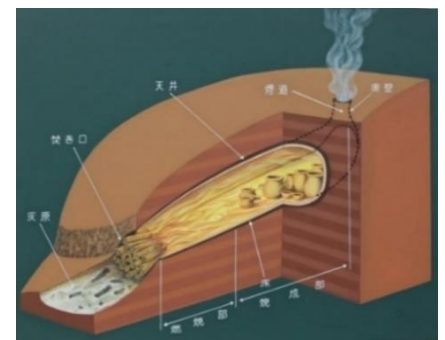
須恵器は、轆轤^{ろくろ}と窖窯^{あながま}を使用して同一規格^{しよ}の製品^{どういつきかく}を大量^{せいひん}に生産^{たいりよう}することや、土師器と比較^{ひかく}して壊れにくく、汚れ^{こわ}にくいことから、その登場^{よご}は日本の焼き物の歴史^{とうじよう}にとって大きな画期^{れきし}でした。

須恵器の生産地^{じようけん}の条件^{じょうけん}が小野田^{その}には揃^{そろ}っていました。

- ★窯^{きず}を築^かくことが可能^{のう}な耐火性^{たいかせい}の強い土^{つよ}、良質^{つち}の陶土^{りようしつ}
- ★長時間^{ちようじかん}高温^{こうおん}を発生^{はつ}し、火足^{ひあし}の長い燃料^{なが}（松^{ねんりよう}など）を供給^{まつ}可能^{きようきゆう}
- ★生産^{じゆようち}した須恵器^{はこ}を需要地^{りくろ}に運ぶ陸路^{かいり}、海路^{びん}の便
- ★須恵器^{せいけい}を成形^{しよせい}し、窖窯^{ぎじゆつ}で焼成^{せんもん}する技術^{こうじん}をもった専門^{しゆだん}の工人^{せんもん}集団^{こうじん}

須恵器の特徴

起源 ^{きげん}	4世紀末～5世紀初頭（古墳時代中期）に朝鮮半島 ^{ちようせんはんとう} から伝来 ^{でんらい}
色 ^{いろ}	青灰色 ^{せいがいしよく}
成形方法 ^{ほうほう}	轆轤 ^{ろくろ} を使って回転 ^{つか} させながら、薄く成形 ^{かいてん} 叩き板 ^{たた} 等 ^{いた} の道具 ^{など} を使用 ^{どうぐ}
焼成方法	山の斜面 ^{やま} を使ってトンネル ^{しゃめん} 状 ^{じよう} にした窖窯 ^{あながま} の中で、酸素 ^{さんそ} の供給 ^{きようきゆう} を断 ^た った状態 ^{じようたい} で、 1000度 ^{いじよう} 以上 ^{いじよう} で焼成
用途 ^{ようど}	飲み物 ^{のみ} や水 ^{みず} を貯 ^{たくわ} える器 ^{うつわ} ・古墳 ^{こふん} の副葬品 ^{ふくそうひん}



▲ 図2 須恵器 窯のイメージ



市指定文化財 松山窯跡出土品 横瓶

2. 小野田の須恵器

初期の須恵器は、現在の大阪府の南部、泉北丘陵帯の「陶邑」と呼ばれた地域を中心に生産されました。5世紀末から6世紀初頭になると、各地で陶邑の技術を導入した地方窯が成立して須恵器生産が活発になり、須恵器の全国的な普及を促しました。

長門国（県域西・北部）では、山陽小野田市須恵と宇部市東岐波で須恵器生産が開始され、本山半島に形成された窯は十数基確認されています。今日に残る焼野、大須恵、松山などの地名は古代須恵器生産を語り継ぐ小野田の歴史的な地名です。焼野の「野」とは緩やかな傾斜地であり、須恵器を焼いた野から焼野といわれたそうです。

最古の窯は松山窯とされ、窯本体は現存しませんが、灰や焼き損じ品などの投棄場所である灰原の発掘調査が行われ、6世紀末から7世紀初頭の製品が出土しています。



市指定文化財 松山窯跡出土品 甕



市指定文化財 松山窯跡出土品



本山岬で発見された蛸壺

松山窯で焼かれていた須恵器の特徴は、器表に流れ出した自然釉が顕著なことです。

3頁「横瓶」の自然釉は、高温で焼かれたため、薪炭の灰がとけて流れだしたものです。

コラム① 6世紀 小野田の人々の生活

6世紀頃、人々は農業を生活基盤としていましたが、その頃を象徴する生業として、窯業があげられます。また遠浅の海辺にタコ漁を中心とする海産業が活発であったのも、蛸壺が今も発見されていることから想像ができます。



市指定文化財 塚の川古墳

塚の川古墳は大型で孤立していることから、この周辺で須恵器を作っていた工人集団の首長クラスの墓である可能性が高いとされます。

2. 小野田の窯業 変革のとき

明治時代になると皿山の製品の播鉢が北海道の開拓村に出荷されるようになります。耐酸性があり寒さに強く長持ちがすると好評であり、下関の間屋を経て北海道に販路が開け、且の皿山は活気づきました。小野田ではこの頃から堀越焼・末田焼（防府市）の陶工が関わっており、明治時代前半には播鉢とともに、堀越焼の陶工によりつくられた1～4斗入りの甕（叩きはندوق）が北海道へ送られていました。

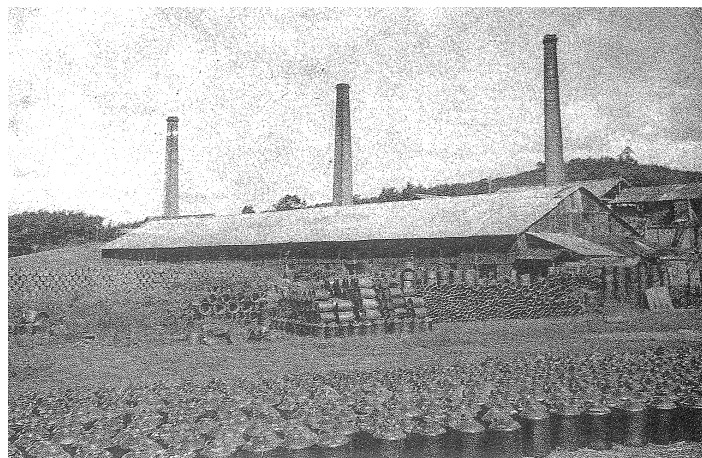
明治10年代以降は、産業の近代化により小野田の窯業も変革のときを迎えます。セメントや硫酸の製造にあわせて、製陶所で焼成される製品も変わり、その代表的なものとして**硫酸瓶**があります。なぜ硫酸瓶が主力製品になったのか、詳しくは第3章で紹介します。

明治40年（1907）の製陶業の山口県地域別生産額をみると、厚狭郡がトップで次に佐波郡が続きます。厚狭郡の主要な生産品は小野田の化学工業用の硫酸瓶であり、他地域の装飾品、家具、飲食器などの陶磁器とは性格を異にします。明治後期の山口県内の陶磁器の生産額の大きな伸びの原因は、硫酸瓶の生産額が加わったことによります。

硫酸瓶とともに、その後生産額を上げる製品が焼酎瓶です。大正3年（1914）には門司大里にあった日本酒類醸造株式会社の焼酎容器として、焼酎瓶の製造が始まりましたが、大正7年（1918）同社は西高泊の郷に関門窯業株式会社を開きました。昭和10年（1935）に社名を帝国窯業株式会社小野田工場と改め、従業員は160名以上で、市内第一の規模となりました。



河野製陶所（昭和15年頃）



帝国窯業株式会社小野田工場

本市の陶瓶工業の戦前までの生産実績は、全国生産数量の70%を占めるほど盛況でした。昭和26年度、小野田市の統計では、市内に26工場、30数基の登り窯を数え、有力な地場産業で、小野田付近の陶瓶工場数30軒、従業員約970人、陶瓶生産数120万本となり、戦後も好景気が続きました。

3. 製陶業の変遷

昭和30年前後から、多量の硫酸の輸送容器は鉄製のタンクローリーに、少量の容器はポリエチレンとなり、鉄道やトラックでの輸送が容易になりました。また焼酎瓶はガラスの一升瓶に変わり、更に建築は煉瓦造りから鉄筋コンクリート建てとなり、瓦は洋瓦に一変しました。こうして製陶所や瓦工場が次第に廃業に追い込まれました。

閉窯のもう一つの要因に、登り窯の構造、規模が余りにも大き過ぎて、小品を焼く窯に切り替えることが容易にできなかったことも挙げられます。

小野田の製陶業が最盛期の頃は、30余りの製陶所がありましたが、現在は昭和6年(1931)に創業した松井製陶所1社のみとなっています。

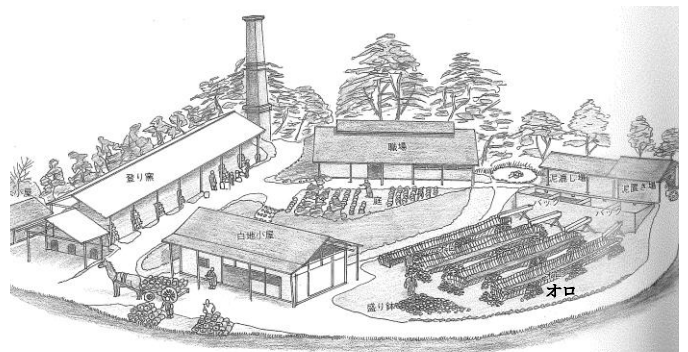
コラム③ 製陶所の泥濾しは大変な作業

当時のある職人さんに聞いてみました。

『大きいバック(水溜め)に泥水が溜まるのに3日かかる。それを10~12日間、沈殿させ、うわ水はのけて、下に溜まった濃い泥水をオロに流し込む。

「オロ」とは、素焼きの土管か竹で囲いを作り、その内側に箆を張ったものである。その中に流し込んだ

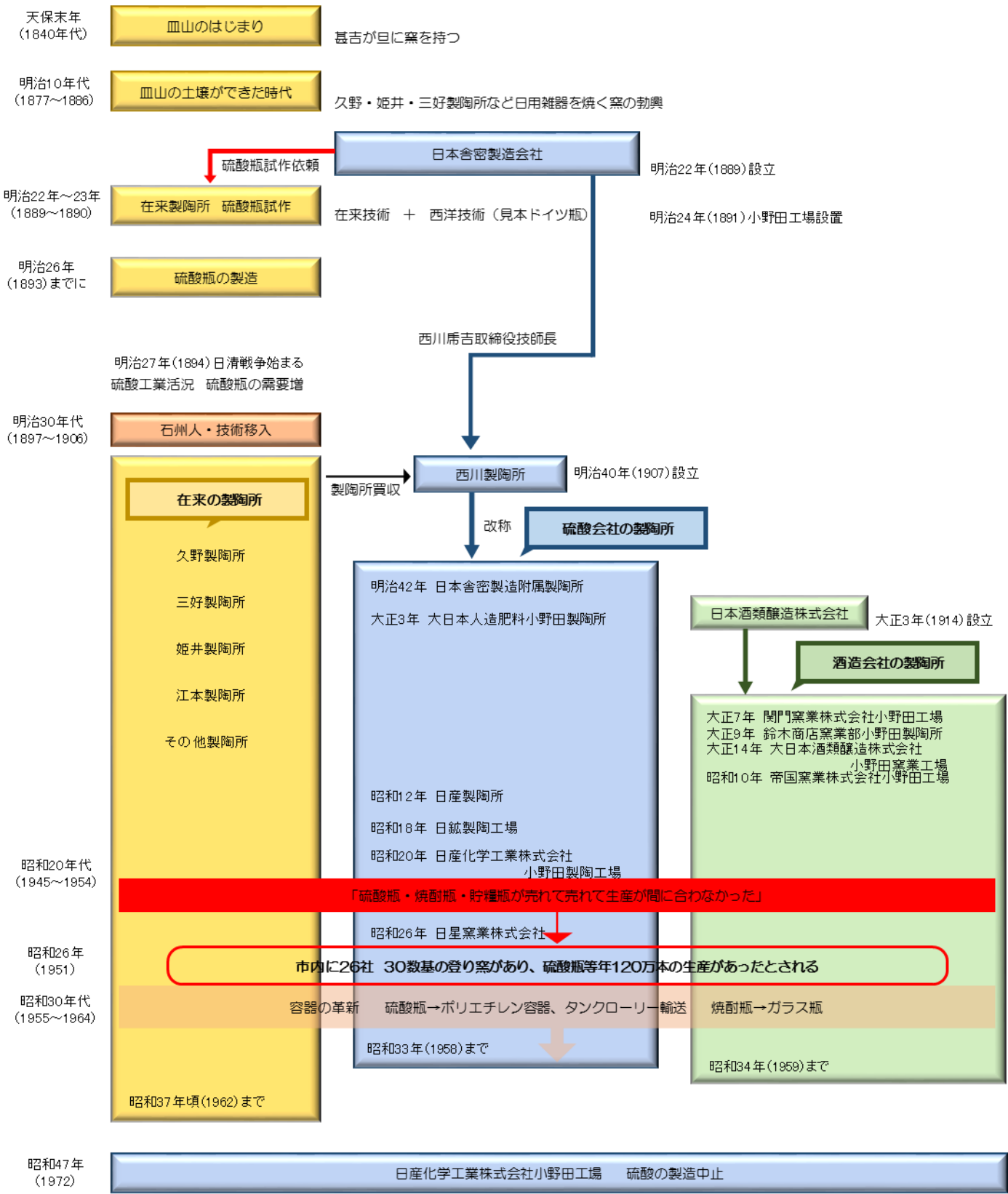
「泥水」の「水」は箆をつたわって外に出、泥水の上部は天日と風で乾く。少し乾いたところを見計らって(オロでは、たいてい12日~15日かかる)盛鉢に盛る。盛鉢は素焼きのため、水気を取り、上に盛った粘土は天日と風で程よく乾き、それを職場に運ぶ。梅雨など長雨にでもおうたものなら、泥濾し人はお手あげ、全く仕事が出来なかった。』



▲ 図4 一般的な皿山の風景

▲ 『小野田の窯業 皿山・その変遷』73頁「職人別調査」を基に作成

皿山の変遷 略図



第3章 近代産業と小野田の窯業

セメントや硫酸の製造にあわせて、小野田の窯業は発展しました。

セメント製造会社と硫酸製造会社の2社が創業し発展したことにより、小野田は、山口県における近代産業都市の先駆けとなりました。

1. セメント製造会社と窯の変遷

明治14年(1881)、旧萩藩士笠井順人は小野田に「セメント製造会社」(現太平洋セメント株式会社)を設立。工場建設用の煉瓦は、小野田の各地で多く産出している陶土で焼成されたものを使用しました。窯の形を変えることで、当初の徳利窯よりも生産能力が増加しました。

セメント関連については山陽小野田市ふるさと文化遺産『小野田セメントと笠井家』をご覧ください。

たてがま つうしょう とっくりがま
堅窯 (通称：徳利窯) ▶
 日本に現存する唯一の堅窯で国重要文化財に指定
 使用年代：明治16年(1883)～大正2年(1913)

- 明治16年(1883) 4基建設
- 明治23年(1890)～同36年(1903) 堅窯増設および改造
合計12基
- 大正2年(1913) 徳利窯廃止
記念物として1基保存



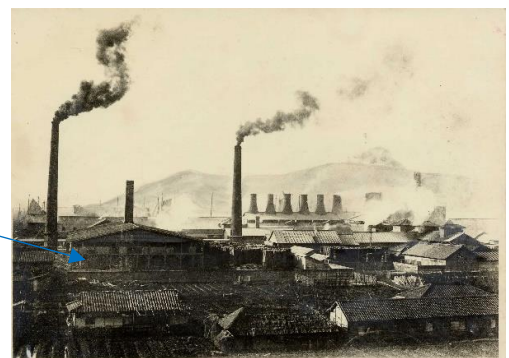
創業時の窯上部分を改造し大型化(焼成部はオランダ積)

創業時の窯の焼成部(フランス積)

堅窯(太平洋セメント(株)蔵)

現存する1基の堅窯は、明治16年(1883)完成の4基のうち、最も西側に建設された堅窯です。創業当時、窯を覆う切妻屋根が存在しており、平成15年に屋根が再現されました。

わがま
輪窯 (ホフマン窯) ▶
 楕円型・ドーナツ状の大きな窯
 使用年代：明治22年(1889)～同23年(1890)



徳利窯が大型化 明治41年(1908)頃
 (太平洋セメント(株)蔵)

ディーチュ窯 ▶

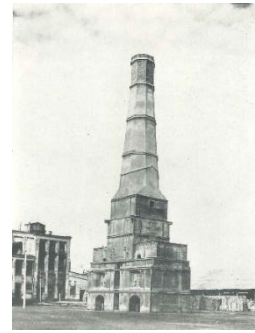
煉瓦造りの高さ約 30m の堅窯

使用年代：明治 31 年（1898）～大正 11 年（1922）

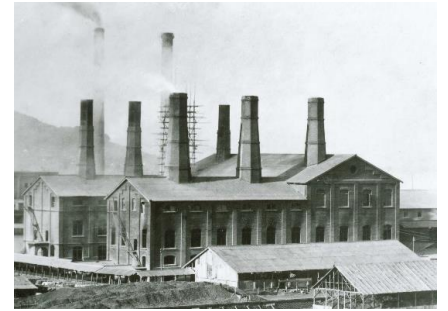
連続式で堅窯 2 基を背中合わせに一体化したもので、
徳利窯の後の主力となった窯

新工場建設は明治 33 年（1900）で、4組8 基建設

建設用の煉瓦を小野田周辺の製造所等へ発注し、
業者数は少ないが、いずれも大口で、小野田地区の
窯業へ与えた経済効果は大きかったと推察されます。



ディーチュ窯（太平洋セメント(株)蔵）



ディーチュ窯（太平洋セメント(株)蔵）

回転窯 ▼

連続・大量生産が可能で、長い鋼板製円筒式

内部に煉瓦を内張りの窯

使用年代：大正 2 年(1913)～現在まで

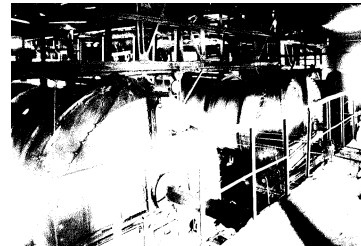
大正 2 年(1913) 回転窯 1 号機の設置により、徳利窯が廃止

大正 11 年(1922) 回転窯 2 号機の増設により、ディーチュ窯が廃止

大正 13 年(1924) 回転窯 3 号機の増設。現在も稼働中



回転窯 1 号機（太平洋セメント(株)蔵）

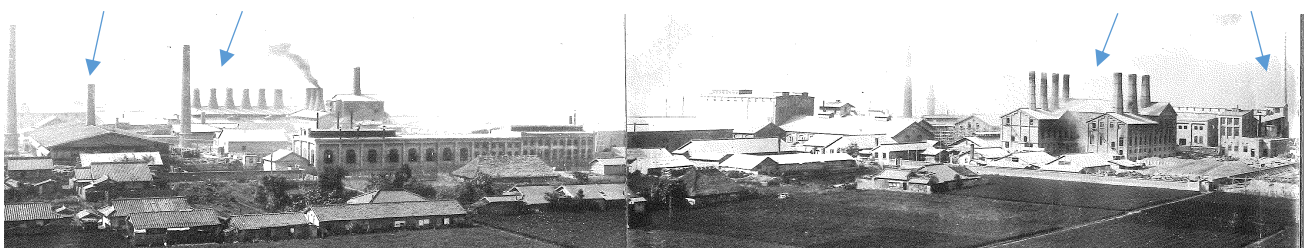


回転窯 昭和 26 年頃（太平洋セメント(株)蔵）

国内のセメント会社では、多くの会社が堅窯（徳利窯）から回転窯に移行していきま
したが、小野田セメントは、ホフマン窯、ディーチュ窯も加え、4種類ものセメント焼成窯
を設置した唯一の会社です。

ホフマン窯 徳利窯

ディーチュ窯 回転窯



回転窯設置当時の小野田工場 大正 2 年（1913）11 月完成（太平洋セメント(株)蔵）

2. 日本舎密製造会社が小野田に進出

第2章小野田の皿山で硫酸瓶が多く焼成されていたと紹介しましたが、それには日本舎密製造会社（現日産化学株式会社）の小野田工場進出が大きく関わっています。

なぜ小野田の地が選ばれたのでしょうか。

会社創設発起人の一人である豊永長吉が山口県の出身で、創設の動機は、旧友のドイツ駐在公使、品川弥二郎からの手紙で「塩変じて薬となる。現今文明国に於ては此の業が中々盛んである」という情報を得たことでした。ソーダ工業の原料となる塩を三田尻など瀬戸内海の近くの塩田に求め、小野田地域は石炭が多く埋蔵されており、小野田近郊や北九州では石灰石も豊富であったこと、また海沿いの土地で原料や製品を運ぶのに有利であったことなどから、その付近で工場の建設地を探します。候補地には小野田のほか門司や三田尻も考えられましたが、笠井順八が小野田への工場誘致に尽力し、明治24年（1891）4月に小野田新開作に工場が完成します。下半期には初めて製品を販売しました。

民間初のソーダ製造工場である日本舎密製造会社では、硫酸の製造から始め、ルブラン法炭酸ソーダ製造法の塩酸・さらし粉、ソーダ等の製造を進め、幅広い無機化学製品が生産されました。ルブラン法とは食塩と硫酸から作った硫酸ナトリウムにチョーク（炭酸カルシウム）を反応させてソーダをつくる方法です。製造装置の一部である塩酸吸収塔は、現在も日産化学株式会社小野田工場敷地内に保存されています。炭酸ソーダ製造、肥料、石油、火薬、ダイナマイト等の原料に硫酸は使われました。



「ルブラン法塩酸吸収塔」 注：見学不可
日本化学会 第1回化学遺産認定

コラム④ まちの名前がインパクト大！

山陽小野田市内では、関連のある主要産業が、まちの名前で使われています。

「セメント町」「硫酸町」「火薬町」

会社の近くに人口が移住集中し、新しいまちが形成されました。



「硫酸町バス停」

3. 硫酸瓶の製造

日本舎密製造会社で硫酸の製造が始まると、その容器として硫酸瓶の製造が盛んになりました。硫酸は従来陶製容器に入れて運搬され、日本舎密でもこれらを他の製造場所から取り寄せなければなりません。価格の高騰は免れず、また不便でもあり、これに代わるものとして、耐酸性にすぐれた且の土に着目しました。釉薬や製造方法などの研究の結果、且の陶器を容器として利用できることが判明し、明治22年(1889)～23年(1890)頃に且窯で硫酸瓶を製造することになりました。

硫酸瓶の製造は、当初信楽や大阪など近畿地方が主でしたが、ネジ式の蓋の開発に成功した小野田では、硫酸の出荷時にネジの部分に石膏を付け、蓋をしっかりと固定して、密封性を飛躍的に高めることができました。また良質な陶土に恵まれ品質が良かったことから、信楽などの他地域の生産量を抜いて全国最大の産地となり、硫酸瓶といえば小野田と言われるほどになりました。

硫酸瓶の試作の際に参考にしたと伝えられるドイツ瓶(写真左)と、小野田で焼成した初期の硫酸瓶です(写真中央)。口縁部はネジ式で、通常の硫酸瓶より小型です。



ドイツ瓶 小野田で焼成した初期の硫酸瓶 硫酸瓶

硫酸瓶の形態の変化

- ★胴体が直立→ひじりが外開き、中継ぎが直立
- ★把手が縦方向→横方向
- 中継ぎ 指4本で握れる大きさで持ちやすい
- ★口がすぼまり、ねじりが深くなる
- ★大型化し、容量が一斗5升(約270)
- ★灰釉→来待釉

コラム⑤



硫酸瓶と焼酎瓶の違いは？

硫酸瓶の製造と同時期に焼酎瓶の製造も盛んでした。この二つの違い、わかりますか？ ヒントは右の拡大写真の中にあります。



答えはこちら(市HP) ⇒



焼酎瓶

4. 硫酸瓶の赤色に秘められたルーツ

硫酸瓶の製造に際し、大量生産が必要だったため、甕作りに優れた技能を持っていた島根県江津地方を中心とした石見焼の陶工を多く呼び寄せています。職人たちは春に小野田にやってきて、秋に帰郷していましたが、やがて明治末年頃には小野田に定住するようになりました。

硫酸瓶は表面が赤褐色で光沢があります。これは「来待釉」という釉薬が使われています。「来待釉」とは、島根県東部の来待地区（松江市宍道町）で産出する凝灰質砂岩の石粉を原料とした釉薬です。石見の土に、陶器も瓦も同じ釉薬「来待釉」がかけられ陶器は「石見焼」、瓦は「石州瓦」と呼ばれています。

且の皿山では、硫酸瓶に来待釉を使用していました。来待釉が施されている製品は、耐酸性にすぐれており、とても丈夫でした。その後、広島県西条地方で来待釉に似た釉薬が開発され、西条来待と呼ばれ、且の皿山でも来待と西条来待の両方が用いられるようになりました。



石州嶋田窯の石見焼甕（はんど）
口径約 41.8 cm、高さ約 46.1 cm
山口大学所蔵 田畑直彦氏撮影

5. 硫酸瓶と石見焼との共通点

来待釉以外にも硫酸瓶の製造には石見焼きの大甕作りの技法が活かされています。蹴轆轤を使用して3段階に分けて成型し、素焼きをせずに、半乾燥させた状態で来待釉を掛けます。焼成する登り窯の構造や窯焚きの方法もほぼ共通しています。

しかし、登り窯の燃料には違いがあります。石見と小野田では陶工や築窯師の往来があったにも関わらず、小野田では大正から昭和にかけて石炭を使用していましたが、石見では石炭の灰がかかるのを嫌がり、松木を使用していたそうです。その背景として、小野田は石炭の産地で、低価格・大量生産が求められていたため、石炭を積極的に使用していたと考えられます。

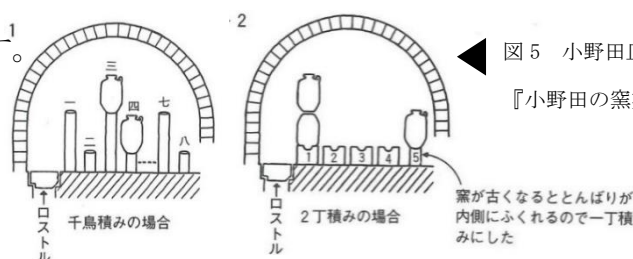


図5 小野田皿山における硫酸瓶の窯詰め
『小野田の窯業 皿山・その変遷』より抜粋

6. ^{りゅうさんびん}硫酸瓶を活用したまちづくり

硫酸瓶の Monument が設置されている小野田橋^{せっち}ポケットパークは、小野田橋^{ぼし}付近が硫酸瓶の積み出し場所^{つだ}であったことから、硫酸瓶^{うんぼんせん}運搬船の「おわに船」をイメージした^{ひろばけいじょう}広場形状となっています。



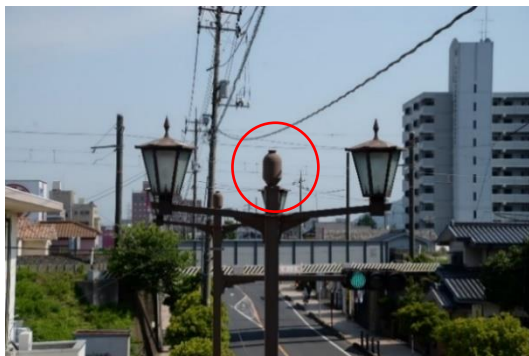
小野田橋ポケットパーク 【表紙及び本編 16 頁マップ⑧参照】



硫酸瓶船積み風景で後方は日産化学(株)

「おわに船」『昭和 26 年小野田市勢要覧』

小野田地域の^{なんぼく}南北を通る道路（小野田駅^{こうえんどお}から公園通り^{こうさてん}交差点を経て丸河内^へ交差点に^{まるごうち}至る）は、歴史^{れきし}のまちが感じられるメインストリートです。



街灯には硫酸瓶の Monument があります。

【本編 16 頁マップ⑩参照】



途中から徳利窯の Monument に替わっています

^{りよくち}緑地や^{どうろ}道路は、硫酸瓶をモチーフにした^{けいかん}景観まちづくりがすすめられています。

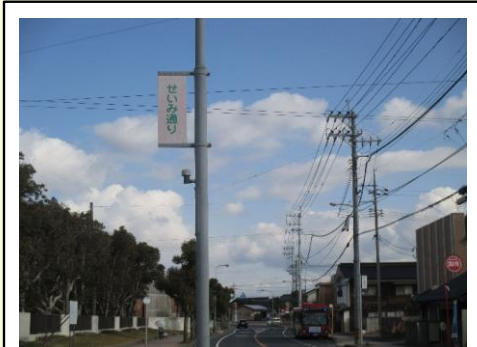


東沖緑地から見えるセメント工場の風景を模した
陶製ウォール



小野田湾岸線に積み上げられた硫酸瓶

【本編 16 頁マップ⑬参照】



①せいみ通り「せいみ」とはオランダ語で化学の意味
 現日産化学(株)前の道路です。小野田メインストリートの歩道は窯業の原点である須恵器をモチーフとし、素焼色を基調としたレンガタイルを用いています。



② 旦橋東側のオブジェ
 (有帆川沿い)



④ とんばり塀



⑤ 帝国窯業跡(見学不可)



⑥ 旧姫井製陶所のバック



⑦ 保育園駐車場

近代化産業遺産群



③ 第二高千帆橋ポケットパーク
(有帆川沿い)



⑨ 旧江本製陶所 且の登り窯



⑩ 三好邸 瓶垣
焼き傷のある瓶を使い、強度を利用し作られたもの



⑪ 旧河野製陶所跡
バック(沈殿濃縮施設)とオロ(乾燥施設)



本編で紹介

- ⑫ 陶工甚吉の墓(P5)
- ⑬ 小野田湾岸線の硫酸瓶(P14)
- ⑭ 山陽小野田市歴史民俗資料館(P22)
- ⑮ 小野田メインストリート街灯(P14)



⑧ 小野田橋ポケットパーク



⑪ 旧河野製陶所跡
登り窯 煙突と上2段の袋

第4章 ガラスアートのまちづくり

1. 窯業の「ガラス」に注目

ガラスも窯を使う窯業のひとつです。昔からの窯業を伝承しつつ新しい市の文化を創造し、全国へ発信しようとしたとき、窯業のひとつであるガラスに注目しました。

本市がガラスに注目し、「ガラスアートのまちづくり」に取り組むきっかけは何だったのでしょうか。

それは一人のガラス造形作家 竹内 傳治の存在です。



第1回現代ガラス展 大賞
月齡 / 西川 慎

2. ガラス造形作家 竹内 傳治



故 竹内 傳治氏

竹内傳治（以下、竹内氏）は、昭和9年（1934）に山口県小野田市で誕生しました。昭和33年（1958）に佐々木硝子株式会社に入社し、取締役、顧問を経て平成7年（1995）に退社。以後フリーとして活躍しました。

竹内氏は世界的にも著名なガラス造形作家として、数々の素晴らしい作品を残しており、その作品は国内外に收藏されています。また、ご遺族からは多数の貴重なガラス作品の寄贈を受け、本市では市内の公共施設などに展示しています。

平成5年度に芸術・文化の部で小野田市栄光賞を受賞し、平成12年（2000）には市政施行60周年記念事業として開催された「日本の現代ガラス展」を導きました。その後の

「第1回現代ガラス展 in おのだ」では審査委員長を務めるなど、故郷のガラス文化の発展に多大な貢献をされました。

現在、本市では竹内氏の故郷に対する情熱と、若手ガラス作家を育成したいという遺志を受け継ぎ、ガラスによるまちづくりに取り組んでいます。



コンポジション#202 新世紀賛歌

3. 山陽小野田市のガラスへの取組

■現代ガラス展

平成12年(2000)の「日本の現代ガラス展」を皮切りに、翌年から竹内氏の指導のもと、45歳以下の若手ガラス作家の育成と、本市のガラス文化を全国へ発信する取組として、「現代ガラス展」を開催しています。

現代ガラス展は3年に一度のトリエンナーレ(※1)方式で開催し、令和2年(2020)に8回目を迎えました。この公募展の位置づけは高く、若手ガラス作家の登竜門的コンペティション(※2)として高い評価を受けており、本市の特色ある文化振興事業の一つです。

第1回現代ガラス展で大賞を受賞した西川慎氏と準大賞を受賞した池本美和氏は、竹内氏の遺志を継ぎ、平成14年(2002)に本市へ移住し、個人ガラス工房を設立されました。現在、次頁で紹介するきららガラス未来館で講師を務めながら、国内外で意欲的に作家活動をされています。

本市の取組として、現代ガラス展の他に、市外や県外美術館での特別作品展も開催しています。



西川 慎 氏



池本 美和 氏



特別作品展/上野の森美術館(東京都)

※1 トリエンナーレ・・・3年に一度開催される美術展覧会。(『広辞苑』第七版)

※2 コンペティション・・・競争。競技会。試合。→コンペ(『広辞苑』第七版)

コラム⑥ 現代ガラス展の魅力

私たちは普段の生活で多くのガラスを使っていますが、現代ガラス展では普段の生活では見ることのない質感、色彩、形などガラスの新たな一面を見ることが出来ます。若手ガラス作家が熱意を込めて制作したガラス作品は、とても美しく神秘的で、それぞれ異なる表情を見せてくれます。開催期間中にはぜひ会場にお越しいただき、ガラスアートの魅力を堪能していただければと思います。



第8回現代ガラス展 大賞
「Weaving Glass-interface-vol.3」/ 佐藤 静恵

■きららガラス未来館

平成16年(2004)に本市のガラス文化の発信拠点として開館したきららガラス未来館は、本市の焼野海岸にあり、作品鑑賞やガラス制作体験ができます。

西川慎氏や池本美和氏のほか、若手のガラス作家が制作活動をしなが、きららガラス未来館の講師を務めており、本市のガラス文化発展のため、様々なイベントを実施しています。



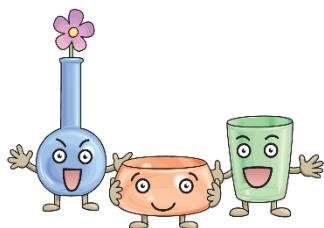
当館に展示されている作品の中には、竹内氏や国内のガラス作家が創作した色とりどりの個性あふれる作品や子どもたちとガラス作家が共同で制作した作品などがあります。

ガラス制作体験では、エナメル絵付けや吹きガラスなど、子どもから大人まで様々なガラス制作体験ができ、熱や技法により生まれ変わるガラスの特性に触れるとともに、作品を創り上げる喜びを体感できます。

また、市内の小学生は授業の一環として、ガラス制作体験と吹きガラスのデモンストラーション見学を行っており、子どもの頃からガラスの美しさを感じ、山陽小野田のまちとガラスと窯業の関係性を学んでいます。

その他にも、出張体験やイベントを行っています。イベントでは、様々な文化・芸術とコラボレーションし、ガラスアートの制作やガラスで作られた楽器を使用した演奏会なども行っています。

ここでしかできない体験ができ、ガラスの魅力に触れられます。



きららガラス未来館キャラクター
カップン・サラピー・コップー



きららガラス未来館 外観

きららガラス未来館

山陽小野田市大字小野田 7534-4
(山陽小野田市焼野海岸)

☎0836-88-0064

開館時間：9時～17時

休館日：ホームページに掲載

入館料：無料(体験・講座等は有料)

<https://www.onodaglass.jp/>

■^{みじか}身近に目にするガラスアート

市内の公共施設やショッピングモールには竹内氏や過去^{かこ}の現代ガラス展^{じゆしやうしや}受賞者の作品が多く展示してあり、ガラス文化に身近に触れ、鑑賞できるようになっています。

本市では様々な事業で「ガラスアートのまちづくり」に取り組んでおり、新施設^{しんしせつ}へのオブジェや、トロフィーの制作などをガラス作家に依頼^{いらい}しています。

また、市内には、ガラス作家と市民が共同制作した作品も多数展示してあります。完成^{かんせい}した作品は、制作した一人ひとりの思いがこもり、とても魅力的な記念作品となっています。



山陽小野田市民病院



山陽小野田市斎場



市役所ロビー



山陽小野田市立ねたろう保育園
(令和4年4月開園)



山陽オート
2020年特別GI共同通信社杯
プレミアムカップ優勝トロフィー

コラム⑦ ガラス制作に^か欠かせない窯

ガラスを^と溶かす窯のことを^{ようかい}溶解炉と呼びます。その中に^{るつぼ}坩堝と呼ばれる^{とうき}陶器があり、ここに溶けたガラスが^{はい}入っています。

ガラスが溶けた^{じやうたい}状態を維持するために、溶解炉内の^{おんど}温度は常に^{たも}1100℃～1300℃に保たれており、坩堝の^{こうかん}交換時以外は^{じいがい}昼夜関係なく溶解炉の^ひ火を入れたままにするそうです。

きららガラス未来館では1年に1回坩堝の交換を行っており、使用後の坩堝は^{かんしやう}鑑賞用として、当館に展示してあります。



溶解炉



坩堝

第5章 窯業の歴史が溶け込むまち山陽小野田

山陽小野田市の窯業の歴史を、時代の移り変わりとともにみていきました。この地に埋蔵されている豊富な資源を活用し、古代から多くの窯が築かれた小野田地域。窯業が一大地場産業へと加速した明治から昭和にかけてその背景には、近代産業の先駆けとなる会社が小野田に進出したことが大きく関わっています。須恵器から硫酸瓶に至るまで、窯業が盛んな他の地域とは、また違った個性を放つ小野田の皿山製品は、山陽小野田市の貴重な財産です。



小野田の皿山製品

近年では、窯業の一つであるガラスに注目し、現代ガラス展の開催などに加え、ガラス作品のブランド化を進めるなど、ガラスアートのまちづくりを推進しています。脈々と受け継がれる窯業をこのまちの伝統産業とし、その物語を紡ぐふるさと文化遺産「窯のまち」を継承していきましょう。



きららガラス未来館での展示販売

今回紹介した山陽小野田市の窯業関連遺産は近代化産業遺産群として、愛知県の瀬戸市や常滑市の窯業関連遺産等とともに登録をうけています。山陽小野田市歴史民俗資料館では、



山陽小野田市歴史民俗資料館 【本編 16 頁マップ⑩参照】
建物の形状が徳利窯に似せて設計されています

それらを紹介するコーナーや、小野田の皿山製品も常設展示しています。

また、産業遺産が数多く残されている山陽小野田市では郷土の産業の歴史と未来を見つめる産業観光バスツアー「大人の社会見学」を実施し、「窯のまち小野田」をテーマにしたコースでは、資料で紹介した産業遺産等を巡り、山陽小野田市の歴史に触れられます。

窯業の歴史が溶け込むまち山陽小野田市の魅力を発見してみられませんか。

山陽小野田市へのアクセスマップ

窯のまちを散策する時は、小野田駅か目出駅からが便利です。



小野田駅までの所要時間

自動車🚗で 山陽自動車道 小野田 IC から 約 5 分
埴生 IC から 約 20 分

飛行機✈️で 山口宇部空港から 車で約 40 分

電車🚆で

山陽新幹線「こだま」で厚狭駅下車

山陽本線 下関駅から新山口方面乗車 小野田駅まで約 40 分

新山口駅から下関方面乗車 小野田駅まで約 27 分

小野田線 小野田駅で乗り換え 目出駅まで約 4 分

(運行本数が少ないため、事前確認必須です)

【謝辞】本書作成において、下記の方々からご教示を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

小野田セメントの窯の変遷 太平洋セメント元社員 台信富寿氏

山陽小野田市の地質 山口大学名誉教授 山口東京理科大学工学部非常勤講師 武田賢治氏

本編の監修 山口大学埋蔵文化財資料館助教 田畑直彦氏

ガラスアートのまちづくり きららガラス未来館関係者の皆様

【主要参考文献】

小田木富慈美「硫酸瓶—近代化学工業を支えた耐酸陶器—」(佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学』第14巻、雄山閣) 2021

小野田郷土史研究会『窯業の里小野田』2011

小野田市歴史民俗資料館『小野田の窯業 皿山・その変遷』1994

現代ガラス展実行委員会『第8回現代ガラス展 in 山陽小野田』2020

島根県立古代出雲歴史博物館『企画展 いわみもの—暮らしを形づくる石見のやきもの』2016

太平洋セメント株式会社徳利窯保存調査委員会『山口県史跡「小野田セメント徳利窯」保存修理事業報告書』2004

田畑直彦「山口県の窯業と石見焼」(島根県古代文化センター研究論集第17集『近世・近代の石見焼の研究』) 2017

西村祐二郎・今岡照喜・金折裕司・亀谷 敦『山口県地質図 第3版(15万分の1)』(山口地学会) 2012

漁 剛志「山口県における近代産業の興りと産業技術資料」(『山口県立山口博物館研究報告』第41号) 2015

『小野田市史 通史』1990

『小野田市史 民俗と文化財』1987

『山口県史 通史編 原始・古代』2008

『山口県史 通史編 近代』2016

【凡例】

本書において所蔵を明記していない資料は、山陽小野田市歴史民俗資料館所蔵です。

ただし、ガラスに関する写真データは、山陽小野田市教育委員会が撮影及び山陽小野田市から提供を受けたものです。